330.4
Mi77

新日本の經濟産業體制

遠藤三郎
南村清二 著

0018799000
0018799-000
330.4-Mi37ウ

新日本の経済産業体制

南村清二・著
遠藤三郎

昭和20
ADA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年5月15日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

973
377

謹呈

南村清二述

新日本の經濟産業體制

附農村對策
インフレー對策

遠藤三郎

序

敗戰の重大責任を負ふべき私と致しまして今更もの云ふ資格もないのでありますが一面失敗者の體驗は其の活用宜しきを得ば將來の爲好參考たるべきを思ひ、航空兵器總局の解散に當り恥を忍んで敢て航空工業關係の各位に別項の如き挨拶を申上ぐると共に當總局の囑託たりし南村清二氏に命じ、今後新日本の進むべき經濟産業體制に關し研究せしめたのが本書であります。急ぎましたので推敲の餘地もあることと存じますが拙速を尊び上梓して爲政要路の各位並に産業界の各位の閲覽に供し度謹呈する次第であります。

昭和二十年八月二十六日總局解散の前日
暗雲低迷する中に米監視飛行の爆音を聞きつゝ

航空兵器總局長官
陸軍中將　遠藤三郎

330.4
M工:37

航空兵器總局の解散に當り航空工業關係の各位に申上ぐ

遠藤三郎

航空兵器總局が新設せられましてから茲に一年有九ケ月其の間長官の要職を汚し不敏非才各位の御期待に副ひ得ず遂に事茲に到りましたことは誠に申譯なく衷心より御詫び申上ぐる次第であります。

然しながら今日迄に於ける各位の御業績を顧みまするのに極めて困難なる事情がありましたにも拘らず、開戰當初飛行機の月産陸海軍を合し僅に五百機程度に過ぎなかつたものが昨年六月には將に三千機を突破せんとし本年七月激化せる空爆下幾多の被害あり、且急速に疎開を實施しつつの作業でありましたにも拘らず、尚且千機を越ゆる生産を持續せられたのでありまして、之れ全く各位の異常なる御努力の結果であり、其の御功績は偉とするに足り、必ずや青史に誦はるるものと信じ、茲に謹んで御禮を申上ぐるものであります。殊に職場に敢闘殉職せられました幾多の英靈竝に其の御家族に對しましては心よりなる敬弔の誠を捧ぐるものであります。

然るに、今や其の御努力も水泡に歸し營々辛苦築き上げられました工場も、或は壞れ或は燒け幸にして災害より免れたるものも其の大部は他の平和産業に轉換するの餘儀なきに到り、神風手拭を凛々しく鉢卷せられた動員の學徒、挺身の女子、應徴の戰士其の他の從業員諸君も夫々歸鄕又は轉業せられ總局及航空工業會は解散するの運命に立ち到りましたことは誠に感慨無量であります。

然しながら靜かに考へまするのに國軍の形態は時と共に變化するものと思ひます、皇軍に於きましても陸海軍の形

遠藤三郎氏寄贈本

態は日露戰爭若くは前歐洲大戰を契機として一應終末を告げ、今次の大戰は空軍一本で實施せらるべきものであつた樣に思はれます。而も其の空軍さへも何れは骨董品たるの存在になる時が來ないと誰が斷言し得るでありませうか。

斯く考へて參りますると軍隊の形は時世の進運に伴ひ變化すべきは當然でありまして、唯茲に絕對不變であるべきは我國の眞姿卽ち國民皆兵の神武其のものであります。

國民の一人一人の胸の中にしつかりと神武＝兒器ならざる兵、戈を止める武＝を備へましたならば必ずしも形の上の軍隊はなくとも宜しいものと思はれます。

古語にも「德を以て勝つものは榮へ力を以て勝つものは亡ぶ」とあります從て今回形の上では戰敗の結果敵側から强いられて武裝を解除する樣に見えまして光輝ある我が陸海軍が解消し飛行機の生產も停止するに至りますことは寔に斷腸の思禁じ得ぬのでありますするが皇國の眞姿と世界の將來とを考へまするとき、天皇陛下の御命令に依り全世界に魁して形の上の武裝を解かれますることは寧ろ吾等凡人の解し得ざる驚異すべき御先見＝神の御告げとさへ拜察せらるるのであります。

近來吾が國の世情はあまりにも神國の姿に遠ざかつて來た樣に思はれます。今こそ大手術を施すべき秋と思はれます。先般煥發せられました御詔勅こそ國內建直しの大號令であり世界再建の神の御聲であると拜するものであります私は斯く考へまする迄には隨分と苦しみましたが今では全くそう信じ切つて居ります。

我々と最も緣故が深く且最も尊敬して居りました大西中將も「輕擧は利敵行爲なるを思ひ聖旨に副ひ奉り自重忍苦すべき」を死を以て訓へられて居ります。我々は今迄とは全く變つた仕事に入るのでありまするが特攻機を作りました其の體驗は極めて貴いものであります。

973
3787

速かに頭を切り換へ、深く敗戰の原因を省察し舊弊を去り經驗を生かし御詔勅のまにまに新日本を再建し而して神武を基調とする德を以て世界の勝者たるべく忍苦邁進すべきものと信ずるものであります。

總局解散に當り聊か所懷を述べ各位の御健勝を祈り從來の御友情に對し篤く御禮を申上げ御挨拶と致します。

新日本の經濟產業體制

南村清二

一

日本は變つたのである。大東亞戰爭の慘敗、昭和廿年八月十五日正午ポツダム宣言受諾の大詔、茲に全く吾が大日本帝國は一大變貌を遂ぐるに至つた。否、本來の日本に立歸つたとも云へる。が、此の嚴たる事實、この事實に吾々は先づ明確なる認識を把持することを要とする。然り、今日の日本は最早過去の日本ではない。全然生れ變つた新日本なのだ。この意識の確立こそ今や最も重大、新日本建設の基礎は一にここに置かれ、ここから總てが新たに發足されなければならぬ。政治も、經濟も、產業も、農村も、一切過去に囚はるることなく、新日本にふさわしく新裝更生の第一步が潔よく勇敢に踏み出さるべきであり、徒らに顧望低回舊衣に戀々たるが如きあらば結果は必ず非、國家の更生を阻害逆轉せしむる以外の何者でもないであらう。

勿論ことは超非常の難業であり、その發足に當つて施策宜しきを得るか否かが七千萬大和民族の運命を最後的に決定する。卽ち日本が新日本として眞に更生し得るか否かは、一に懸つて向後の施設政策の如何に存すべく、須らく宇

宙透觀の氣宇、區々對立的小感情の如き最早全然之を棄て去り、日本本來の和に歸るべきであり、武によらず和を以てする。大きく世界と和することであり、眞の意味の八紘爲宇、神の世界の建設に向つて此の際その第一歩が踏み出されなければならぬ。

二

新日本の發足は、一方にポツダム宣言の完全履行と、他方に、それと並行して眞の意味の日本の更生——舊日本の再生に非らず——に大眼目がおかれなければならぬ。而かも、たゞさへ戰後極度の物不足、加へて今回の尨大なる現物賠償、駐屯軍の食糧の賄ひ等々今後に於ける吾々國民の勞苦は眞に〳〵想像に餘るものがあり、恐らく年一回の映畫さへ之を樂しむの餘裕とてなかるべく、攷々營々來る日も、來る日も只眞黑になつて働き續けなければならないと云ふ、かうした惡條件を吾々は如何に克服し、併せて新日本の建設を如何に推進せしめうるか。

第一は、勞働觀念を更新せしむることであり。第二は純正資本主義體制を實施することである。

三

食べもの、觀もの、着もの、凡そ官能力一切の樂しみが假令なくとも、仕事が面白い、働くことそのことに無上の樂しみがある。と云ふ、かう云ふ境地に勞働をもつてゆくことが此の際特に必要であり。かくてこそ勞働に永續きが出來、創意工夫が湧き、增産可能、前敍の如き惡條件も易々克服出來るのである。が、然し、勿論それは命令では不可、どこ迄も人間の本性に卽し、自主的にさうなつて行くのでなければ駄目である。では、どうすればよいか。曰く依眞體美に勞働の本義をもつて行くことであり、それが根本的の要件である。在來多くの人々は勞働を以て單に自己收入の源泉に過ぎないかに觀念してゐる。つまりそれらの人々に取つて働くことは只報酬を獲ることが目的であり、

働くことそれ自體は目的ではないのである。ここに大きな觀念上の根本的誤りがある。勞働を苦しきものと感ぜしむるのはそれがためであり、それは寧ろ當然だと言はなければならぬ。勞働の本義は然し決してさう云ふものではない。依眞體美こそ勞働の眞の本義であり、卽ち、どうすればより完全な品物を作りうるか、そこに眞を繹ね、眞に基いて工作する。又、どうすればより美しく品物を作りうるか、そこに色彩、模樣、恰好等々種々工夫を凝らし、以て美を體美する。さうすることが勞働本然の目的に外ならないのであり、だから、單純、複雜如何なる勞働と雖も、依眞體美なくしては絕對に成立し得ない。只、問題は兎角物に迷つて依眞體美が二の次ぎとなる。否、そのことを全然逸脫して終ふことになる。それが在來多くの獲得手段視される迷ひの勞働であり、故に、要は、依眞體美を目的として明確に意識し、以て積極的に行爲することである。然るときその一つ一つに創意工夫が湧き、樂しく、面白く、仕事そのものに知らず知らず全心全靈が注ぎ込まれてくる。全く時處を忘れて働きそのものに沒頭するようになるのである。蓋し、是れ實に人間本性の必然でゞり、その結果は必ず優秀なる生産物の出現となり、働きに自らハゲミがつき、終日働いてもさして疲勞を感ぜず永續きが出來るようになる。そのことが亦働く人その人の人生を明るく張りあるものたらしむるは謂ふ迄もない。それは多くの體驗者の既に齊しく立證するところ、(註一) 況や、他方に、科學と藝術との必然的發達進歩を促し、その發達進歩は更に勞働の依眞體美に反映し、その成果を質的にも量的にも向上せしむる。卽ち相互に因となり果となり、生産不斷の優秀多産を通じて正しく人類の文化に貢獻することともなるのである。

されば此の際の要は、須らく此の依眞體美の本義に勞働をもつて行くことであり、眞の自覺に勞働者を導くことである。斯くする所樂しみなき敗戰後の生活にもその仕事を通じての慰安が與へられうる。働くことそのことに津々無

限の聖なる樂しみが發見體得され、疲勞も少なく、長時間の勞働にも難なく堪え得ると云ふ、無論優品多産の成果に於てボッダム宣言の完全履行も可能、正に疑ひもなく新日本發足に於ける最も適切有效なる妙策たるべきは論を俟たない。而かもその指導は極めて易々、一片の文書、口話を以てして充分に可能、蓋し、憧眞憬美は元來人間の本性であり、美の鑑賞、眞の翫味を介して神と一體蓋歸の至境に開眼する、ここに人生最高究竟の目的が有るからである。(註二)故に、誰れしもが一と度その話を聽くとき容易に轉迷開悟、即時實踐可能、而かもその實踐と同時に效果の偉大さに皆駭かざるは莫いのである。

要は、依て以て樂しみなき國民生活の今後に眞の樂しみを發見せしめ、長間時の勞働にもたゆみなき張りと辛抱力とを與へしむる。斯くして始めてこの苛酷なる諸條件下ボッダム宣言の完遂も可能、新日本も亦たくましくその更生の歩みを踏み出しうべきである。

註一、拙著「生産增强隘路打開の根本策」一四八頁、「勞務の本義」參照

註二、拙著「純正法理論」一一五頁、「盍歸」參照

四

だが、さうした本義的勞働も、それが正しく國家に由て認められ、その價値發揮に必ず適當なる報酬の與へらるることが必要であり、さうした體制に國家の産業が機構つけられなければ未だ決して眞の實效は擧げ得られない。では如何なる機構體制たらしむべきか、曰く、純正資本主義體制、即ち是れ。ではその純正資本とは果して何か、在來の概念では物乃至その代替者たる貨幣のみを指摘して資本だとした。然るにそれは誤りであり、貨幣のみが決して資本ではなく、人間勞力も亦資本、貨幣のみで固より生産は成り立ち得ないからである。

資本とは最も純粹に、それは生産の元でなければならぬ。即ち、生産をして事實可能ならしむる所以の生産の元、それが眞の意味の資本、純正なる資本概念でなければならぬ。かかる意味の資本に二つがある。一は「神の創造力」乃至その創造力の體荷者たる「物」であり、今一つは人間の「勞働力」である。種子が芽を萠き、生長して花をつけ蘂て實を結んで籾となる。それが神の創造力であり、籾は則ちその創造力の體荷物、それが生産の元、資本たるは謂ふ迄もない。が、種子を蒔き、苗代を作り、植ゑ、除草し、刈り入れして米とする。それは人間の勞働力であり、齊しく是れ生産の元、勞働の參加なくして生産は成り立ち得ないからである。そこで以上「神の創造力」乃至「物」と「人間の勞働力」、この二者こそ正に生産の元として、最も純正なる意味に於ける資本たるは言ふ迄もない。而かも二者は決して對立ではなく、協力互助の關係に在り、始めて生産は成立し得る。只、後者は前者の人間的發露として結局は神の能そのものに外ならないのである。と云ふのは、人間の肉體的能力も、精神的能力も、共に神に由し與へらるるものであり、前者は言ふ迄もなく神の創造たる人間肉體の力であり 後者と雖も、それは要するに認識に基づく神の創造法則の經驗化、知識化を基礎とする。それは故に只徹頭徹尾神の法則に順ふことに由てのみ事實可能のものだからである。そこで斯く觀念し來たるとき、故に生産の元、資本の云へば、それは究極「神の能」だと云ふことになる。神即資本、資本即神、茲に則ち最も純正なる資本概念があり、斯かる意味から吾々は資本と云ふものの尊さを深く感じることが出來る。同じ意味に於て亦人間勞働力にも吾々は齊しく資本としての尊とさが感ぜられる。

そこで叙上の見地から茲に謂ふ純正資本主義體制に在つては、物即ち貨幣と人間勞力とを共に資本としてその再健に於て機構づけられる。即ち、ここでは事業經營の主腦者は勿論のこと、工員でも、技術者でも、事務擔當者でも、既に相當の勤續年數を重ね、人格、技術、技能、熟練の程度等事實恥かしからざる一定資格を備ふる所の勞務者に對

しては、總て是に資本家として待遇と、名譽と特權とが附與され、月給制に於てその生活が保證され、價値發揮の如何に由り賞與が與へられ、更に毎期その業績に應じて配當を與へられる。又、經營協議會にも參加して經營上發言の權利も附與されるのである。ことの詳細は別冊拙著「生産增强隘路打開の根本策」に譲り、要するに、此の制度が如何に働くものにとつての光明となり、刺戟となり、必然異常の增産を結果するに至るかは實施工場に於て事實試驗濟みであり、今試みに左に一例をとる。

此の會社は昨年八月改組、その組織の大要は、平工員、準社員、社員、參事、重役と順次昇進の道が開かれ、準社員以上が卽ち勞力資本家、それは月給制、賞與制であり、定期、臨時に生産會議（協議會）が開かれ、それにも出席する。そこで實施後僅三ケ月間の實績として注目さるべきは出勤率の好化であり、準社員以上の月給者は九七%、農繁期でさへ九五%、日給者（平工員）も將來への希望ある故か八八%の出勤率である。又生産品の質的向上が著しく、納品合格率は九五%より九八%、殆どオシヤカなしの好成績。就中生産會議の效果は特に顯著であり、會長より先づ、戰爭の現況、統帥部よりの要求、そして吾が社の受註狀況を報告し、前戰の健鬪に應ゆるため是非期日迄に之を生産完納せねばならぬ所以を明かに說明して協議に入るが故に、期せずして各員皆眞劍になり、鬪魂に燃えて發言する。正に戰爭と工員との直結であり、而かもかくして協議決定された所のものを各自が亦之を事實實行するのだから、責任感は自ら强まり總てが積極的に行動される。つまり仕事は最早會社の仕事ではなく自分達一同の仕事、自分達こそ事業經營の主體であると云ふ觀念の下。その自主性の復活により總てに創意工夫が加はる。働きに性根が入り、自律的に黽勉努力、能率好化は蓋し當然である。從て量に於ても三ケ月前に比し早くも約三倍の增産となり、而かも資材の無駄が減じ、逆に遊休資材が浮み出て來た。又、盜難が激減し、最快も心に堪えざる現象は、平工員の考へなり、要求なりも總て準社員以上の役付工員を經て生産會議に反映され、會社でも務めてそれに應じるの方針を取れるためか今では工員の家族までが會社第一主義となり、休ませては會社に申譯なしと云つて工員の衞生に迄家族が氣を配ると云ふ狀況、更に、學徒に至つては、之に是非卒業後此の會社に働かせて貰ひたいとの希望者が多く、今その決定に困つて居り、從つて學徒が亦實に良く働くと云ふ、以てその增産效果の顯著なる推して知るべしである。藍し、此の體制がその無限昇進の道を開けることに由り工員に希望を與へ、前途に光明を點じて居るからであり、而已ならず働きに應じての收入の增加、又、その資本家としての自主性の復活が、正に人を人として活かすからであり、工員が工員として眞に生きて働くことに原因する。

叙上の實績に徵して明らかなるが如く、正しく是れ活人的體制、故に、ひとたび此の制度にして採用されんか、國民は忽ちにして希望に萠え、その生活に光明が點ぜられる。期せずして國民は一致欣然躍然として負荷の使命の遂行に挺身するに至るべきこと蓋し必定、かくしてこそポツタム宣言の完全履行も以て可能たるべく同時に日本としての更生も亦期し得らるべきであり、要は須らく此の制度の卽時斷行に由り、沈み切つた民心に、此の活人蘇生の妙手を以てすべきであり、正に是れ新日本發足としての第一要諦である。然るとき國民の信賴は翕然として政府に集まり、爾後の政策、その爲す所に國民は唯々無條件に追隨し來たるべきは蓋し火を睹るよりも明白である。此の難局の收拾が只斯かる巨大なる政治力を基礎とすることに由てのみ可能たるべきは更めて謂ふ迄もない。

五

更に農村對策としては、叙上資本概念に基づき、一定資格に於ける小作農を自作農化せしむることを此の際必要と

する。詳細は別途に於て之を明らかにするも、要は、物は總て神の與ふる所、物の所有者はその物の使用價値を全に發揮活用せしめ、以て國家社會に貢獻せしむるの義務を負ふの精神に於て、土地の如き特殊物件は、そこに一定の私有限度を設け、自家耕作能力を遙に超えた私有は之を許さず、眞に土地を愛し、至誠耕作に精進する小作人には國家の補助に於てその土地を私有に移さしめ、自主性の附與により農生産に遺憾なきを期せしむべきであり、斯くして始めて農村が正しく軌道の上眞に增産の實效を擧げうるに至るべきは蓋し必然、是れ亦多くの實例の既に明白に實證する所、今や、食糧問題は正に國家緊急の一大事、須らく舊套に拘泥することなく茲に新日本の發足に當り、敢然之を實行して、速かに五百萬農民に希望と光明とを點ずべきである。

六

若し夫れインフレーの問題に就ては、別冊拙著「新らしき價値價格學說の提唱」に於て詳細究明せるが如く、凡そ價格の構成にはそこに一定の法則があり、八つの要因が互に因となり果となり、極めて複雜なる關係に於て價格は構成される。從て、かゝる法則の存在を度外視しての人爲の價格構成が如何に現實と沒交涉の關係に在るか。現に公定價格なるものが、今日全く現實と遊離して存在する事實こそその最も明白なる證據、卽ち、他方に必ず闇相場なるものが法則的に形成され、以て事實上今や覆ふべきもなき惡性インフレーとなつてゐるのである。從て若しこの儘これが放置されんか、軈て恐るべき事態への推移が豫想される。

元來、インフレーの最も恐るべきは、一は生活必需物に在つて、その絕對量が不足を告ぐる場合であり、他の一つは、價格の昂騰が大衆購買力の限度を遙に超え、富裕階級のみに物が壟斷さるるに至つた場合である。だから統制は常にこの絕對量の確保と、購買力分配の公平とに向けらるべきであり、然らざる限り、如何に公定價格を設け貯蓄を奬勵し、賃金諸所得に抑制を加へても決して實效は擧らない。元來一國通貨の膨脹は固より物價の昂騰を促す一原因であり、從て價格は必ずそれと相應じて昂騰する。蓋し法則の必然、然し、そのこと自體は決して憂ふべきことではないのである。謂ふ迄もなく1/2と4/8とは同値であり、だから例へば通貨が十億の時物價が六だつたものが、通貨百億に激增して物價が六〇となつたとて、それはそれで一向差閊へはないのである。問題はその膨脹通貨の分配に存するのであり、その分配が働きに應じ、至公至平に、卽ち十の價値發揮には十の、六の價値發揮には六のと云ふ風に、その分配が必ず正しく行はるることが絕對の要件であり、然る限り、通貨の膨脹に件ふ物價の昂騰そのことは全然問題とはならない。只憾むらくは現下の分配は、その資本主義機構の故に勞賣の間その分配は極めて不均等であり、加ふるに賃金統制令の不當壓迫の下大衆は極めて不利の狀態におかれてゐる。茲に卽ち今日に於けるインフレー的憂患があるのであり、而かもこの缺陷は、叙上産業及び農村に於ける純正資本主義體制の實施に由り完全に除去さるべく、インフレー對策は只此の一事に盡くるものとも云ひうる。之れを別にして凡そ如何なる方策と雖も恐らくは無效、現下その事實が亦最も明白に之を立證しつゝある。

今や戰爭終結し、その後始末に伴ふ通貨の膨脹は倍々その大を加へんとする。宜しく至公至平、その分配に遺憾なきを期すべきであり、是れ實に刻下喫緊の要務、若し一歩を誤らば忽ち惡性インフレーを招集し、容易に收拾し難き事態への恐るべき推移が豫想される。

七

重ねて言ふ、日本は既に過去に沒し去り、今や敗戰と云ふ此の異常な陣痛の下新日本は呱々の聲を擧げたのである。而かもその環境たるや、それは一段と茨の道であり、こと實に容易ではないのである。

が、問題はその取るべきの道果して當を得るか否かに存し、道正しければ荊棘も敢て決して障碍とはならぬ。要は過去に拘泥せず、濶達の氣宇、大局を透觀し、まこと新日本としての新裝に於て諸制度機構を根本的に改むべきであり。就中、國家最大の癌たる資本主義體制を先づ第一に純正資本主義機構に改鑄すべきである。若しこと茲に出でず舊衣をそのまゝ國民に荷はんか、國民は決して之れに附かざるべく、逆に生産放棄の恐るべき結果を招くなしと斷じ難い。若し夫れ米英の支配下、資本主義の排棄を不可なりと考ふならばそれは杞憂に過ぎず、そこに當然の事理の存する限り、米英の聰明を以てして之を抑制するの道理はない。當然の事態とは何か。國家には國家としての特殊の特質特性があり、之を無視して慢りに他を模することの決して成功を齎してうる所以の道に非ざることは自明であり、現に今次慘敗の原因の主として此の機構よりせる各種の矛盾に存せしことは既に明白なる事實に囑する。況や純正資本主義は資本主義の斯かる缺陷を埋むる進化の體制であり、その基礎原理は和に存するのである。即ち爭ではなく、和、新日本は最早全然鬪爭は放棄すべきである。吾が肇國の理想八紘爲宇は、帝國主義的領土の擴張と同義語なるかに外國に誤り傳へられてゐるのであるが、それは全く然らず、その眞の意味は和であり、各民族國家が各その獨立を保持しつゝ。その特有の文化を以てして相互に協力互助する。即ち和して以て世界を眞の神の國たらしめんことに存するのである。それは憧美憬眞、鑑賞翫味、以て神と一體化せんとすることに人間の根本本性があり、そこに人生最高究意の目的ありと觀ずる哲學說に立脚し、物は要するにそのための手段たるに過ぎない。その手段たるべき物を目的なりと觀ずるところに爭鬪發生の原因があり、戰爭が然りとして之を排する。斯かる思想目標に於て神の道を行ぜんとする純正資本主義の行き方に彼等の承認の得られざる道理はないであらう。

要するに、新日本の今後に生くべき道は只この日本本來の道即ち和に歸することにあり、大きく世界と和することを以て立國の基本とし、凡ゆる政策をここに樹つべきでなければならぬ。先づ以て叙上資本主義體制の即時實施に由り、內勞資の關係を和し、又その所産を以てして理物賠償の責めを全ふし以て米英と和する。國民の今後は只管に依眞體美するに在り、生産物の眞化、美化は取りも直さず神の姿の現象への現顯であり（註三）、依て以て神人一體、盍歸の目的達成に資せんとする。斯かる聖なる神の道に向つて默々精進する。それが新日本の執るべき道、それでいいのであり、米英ソ支何れの國たるを問はず斯かる神の道を阻止するの權利はない。否、至誠一貫この道を行じ、事實優秀多産を以てして世界人文に貢獻するところ、そのまごころの斷じて通ぜる筈はないと思ふ。新日本の更生はのひたむきなる精進に由てのみ與へられうる。若し鬪爭を以て舊日本への再生を夢みる如きあらば、妄亦酷し。

繰返し云ふ、神の心、神の道に於て大きく世界と和する。これが今後に於ける日本の行き方、日本自らを眞化し、美化し、科學の國、藝術の國たらしめ、その優秀巧微の特色を以てして世界の文化に燦然たる光芒を投ずる。それこそが眞の意味の勝者であり、鬪爭を以てせず、和を以て勝つ。稱して之を無手勝流と云ふ。この無手勝流こそ正しく日本の更生、新日本建設の唯一つの方法でなければならぬ。

今や國民は擧げて慘敗の後を受け全く意氣阻喪消沈し切つてゐる。須らく速に新日本の眞姿を明徵にし、國民をしてその嚮ふべき所以の方向を知らしむるを以て最緊要とする。何よりも先づ純正資本主義體制に基づく産業、農村の改造再出發こそ今や最も急務、敢て爲政要路の諸賢に聞す。

註三、拙著「純正法理論」一八二頁「勞働」參照

昭和廿年八月廿六日拂曉擱筆

973
377

973
377

新日本産業建設具體案

新日本建設の大眼目は、一方にポツタム宣言の完遂、他方に、消沈し切つた國民に希望と光明とを與ふるに在り。即ち、働きそのもの中に眞の樂しみを發見せしめ、長期苛酷なる勞働にも喜んで耐へ忍ぶ。根氣を造らしめ、その所産の精華を以てし廣く人類の文化の進展に貢獻せんことを存しなければならぬ。願望は一に、人類の總てが各の完成に於て相互に瞳み合ひ、愛し合ふ眞の平安樂園、神の國、たらしめんとすることに存す。而して大綱を以て、その基本體制が純正資本主義實踐を通じて之を示すに在り、茲に立國の大精神がおかれなければならぬ。

以下、その調査事項を略叙せん。

一、ポツタム宣言完遂に要する物の種類とその數量

イ、駐屯軍の經常所要を含めての國民生活に於ける必要物資とその數量

ロ、向後の國狀に鑑みての國民生活に於ける必要物資とその數量

ハ、解除歸還軍人の數

皇軍解除による顯しき歸還者に速に職を與へ、その生活を保證することは國家直面の最大問題なり、之を主として産業方面に吸收するを要とすべし

一、設置事項

イ、日本産業銀行

國營とす、産業團體への資金貸出しその他を目的とす

資本額（物貨資本）は國家の實狀に照らし至急研究決定のこと

金は殘餘軍費（廿年度分も相當額あるべし）を以てし、不足は公債を以てす

通貨發行權を附與し、資源の價値評價に基き、その範圍内に於て、經營上必要額に限り當該産業團體に貸出すことを得るものとし、その場合必要の限り通貨を發行し得ること

預金も定期一本とし、主として今次の解除軍人への恩賞金を吸收すること

貸出しは産業關係に限定すること

ロ、國家への奉納報與金及び國家支辨の缺濟金の取扱ひは總て本銀行に於て行ふこと

産業會社の設置

産業は民營を原則とし、國家の實狀に基き許可制とす

ハ、工員養成所設置

會社創立に關する法律其他の必要指示を急速決定のこと

歸還軍人の其他を收容し、一定期間技能の育成を圖る

依眞體美の精神と實踐を主眼とす